

バイリンガル育成の基礎

- 家庭における母語育成のためのかわりを中心に -

シンガポール日本語補習授業校
校長 森 宏 介

はじめに

前稿では、日本語補習授業校が学習指導要領に準拠した学習を展開しているものの、学習指導要領が定める標準時数の半分から3分の1程度の授業時数しか確保できないことを紹介しながら、補習校で学習するにあたっては、それなりの素地が必要であると申し上げました。

言葉の教育は、子供がこの世に生まれた時から始まります。また、最初の語学教師はその子の両親です。6歳になった子供が十分な素地を持ち得なかったりすることがないように、それまでの間に、家庭でしっかりと日本語の素地を形成しておくことが大切です。また、日本語学習を継続していくうえでも、家庭のサポートは欠かせません。

それでは、どのようにすれば日本語の素地が形成できるのでしょうか、また、日本語学習を継続的に進めていくうえでの留意点は何でしょうか。

私は、20年間、海外の日本人学校を含む公立学校で教壇に立ってきました。その後は管理職として勤務し、主に国語科、社会科及び国際理解教育に関する教育研究に努めてきました。その意味で、初等普通教育の専門家であるとの自負もっています。しかし、2カ国語以上の言語で学習する子供に日本語を教える日本語補習授業校に勤めてわずか2年です。したがって、その道の方法論を語るには遠く及びません。そこで、本稿の展開にあたっては、バイリンガル教育に携わっている方々の研究成果等を引用しながら2カ国語以上の言語を使って子供を教育するうえでの秘訣や留意点を探ってみます。

家庭内の会話だけでは不十分です

バイリンガル教育の第一人者である名古屋外国語大学教授の中島和子先生（前トロント大学教授）は、母語を「初めて覚えたことばで、今でも使えることば」としています。また、母語は、現地語よりも弱い言葉になることがあります。先生は、母語と呼ぶには底が浅いこの言葉を、母語と区別して継承語と呼んでいらっしゃいます。

子供が学齢期になり、現地の子供と深い関係を築くようになると、しだいに母語は弱くなります。母語がしだいに継承語に近づいていくのです。また、それが加速すれば、親がいくら日本語で語りかけても反応しない状態に陥ることもあります。外国での滞在期間が長い、母語が完成するずっと以前の幼少期から日本語環境が十分ではない、両親とのかかわりに乏しい等の悪い条件が揃え

ば、両親が日本人の場合でも、子供自らが母語を捨ててしまうこともあるようです。また、日本語による日常会話はできても、日本語で書かれた書物を十分理解できない、自分の考えを日本語でうまく伝えることができない等、学習に困難を感じる例は、枚挙にいとまがありません。

日本語補習校に通う子供の日本語は、母語と言っても差し支えありませんが、すでに継承語としか言えないレベルの言葉になっている子供もいますし、将来的には、日本語を失ってしまうのではないかと心配する子供もいます。このような例をもとに考えると、家庭内での会話だけでは、母語を一定のレベル以上に維持することは困難であり、そのためには、それなりの努力が必要であるということが言えそうです。

ここで、補習校で学ぶ子供に目を移し、小学5年生以上の学年について、日本から来たばかりの子供と日本における生活経験に乏しい子供とを比較してみます。

日本から来たばかりの子供が日本語に強いのはあたりまえです。したがって、一概に大きな問題はありません。一方、日本における生活経験に乏しい子供は、一般的に日本語が弱い傾向にあります。なかには、日本における生活経験が豊かな子供を凌ぐ日本語力をもつ子供もいます。そのような子に、「日本語と英語とどっちが得意なの」と聞いてみると、必ずと言ってよいほど「どちらも同じ位」あるいは「英語」という答えが返ってきます。2つの言葉を高いレベルで操っているのです。このような子供は、高い言語センスと語学の才能を持ち合わせていると考えられますが、それだけではなく、私は、ご家庭での幼少期からの教育が結果として現れているのではないかと思います。そのように考える理由となる例をひとつご紹介しましょう。

補習校に入学を希望する場合、願書とともに、個人票と入学時質問票をご提出いただいています。私は、面接審査にあたって、日本語の学習経験を中心に願書等の書類に目を通します。直近まで日本の学校に通っていた子供もいれば、日本での生活経験が全くない子供もいるなど、日本語の学習経験はさまざまです。ある時、補習校も含めて学校での日本語学習経験が全くない子供が面接審査に望みました。1年生の始めからではありませんので、現在、補習校で学んでいる子供たちと同等、またはそれ以上の日本語力が要求されます。正直なところ、面接審査にあたっての私の心は、あまり晴れやかではありませんでした。学校での学習経験が全くない子供に越えることができるハードルではないと思ったからです。そのテストの結果を見た私は、驚きを隠すことができませんでした。文章の読み取りや漢字等の言語に関する知識、教科書の音読等のすべてにわたって、学年相当のほぼ完璧な国語力をもっていたのです。私は、つい、お母様に「どのようにして学習なさったのですか」とお聞きしました。

その子供は、日本人学校も補習校もない地域で育ちました。国際校もあるにはあったのですが、入学希望者が多く、最後まで入学できないまま過ごしたそうです。したがって、現地語による授業しか受けることができなかったのです。この状況に立つ向かうべく、ご両親は、日本から通信教材を取り寄せ、子供の帰宅後、ホームスクーリングを展開。母親が教師となり、国語だけでなく他教科についても日本語で学習をしたそうです。

自分の子供が自分にわからない言語で教育を受ける。学習を十分理解しているかどうかすら検証できない。ご両親は、大きな危機感をお持ちだったのでしょうか。しかし逆に、その危機感があったからこそ、ご家庭で素晴らしい教育が展開できたのではないかと推測します。

母語の育成は「発達段階に応じた適切ななかかわり」から

中島先生は、0歳から15歳までの言語形成期を6つに分け、それぞれの時期に合ったなかかわりや働きかけが重要であるとおっしゃっています。参考のために、簡単にまとめたものを紹介します。

(1) ゆりかご時代 (0歳から2歳)

母語を話し出す時代。子供は、愛情をもって話しかけられた言葉を聞き分け吸収する。したがって、この時期のキーワードは愛情。

(2) 子ども部屋時代 (3歳から4歳)

日ごとに語彙が増え、言葉で気持ちを表現し、言葉で考えることを学ぶ時代。長時間ナーサリーに預けっぱなしということはせず、日本にいたときと同様、あるいは、それ以上に母語が十分に伸びるように努力をすることが大切。英語には徐々に触れさせることが重要である。

(3) 遊び友達時代 (5歳から6歳)

幼稚園やナーサリーで集団生活ができるようになり、言葉の分析力もついてくる時代。文字に対する興味も出てくるので、毎日、本の読み聞かせ等をする、本を読みたがるようになる。この時期に2ヶ国語の環境に置くと2つの言語を自然に学び取っていくが、日本語を大切に、英語の習得は焦らない方が賢明。

(4) 学校友達時代前半 (7歳から8歳)

話し言葉がほぼ固まり、読み書きの基礎ができる時代。親子の質の高い話し合いや交流がとても大切。いっしょに日本のビデオを見たり、本を読んだり、通信教育の勉強に楽しく取り組んだりすることによって、日本語力はぐんと伸びる。この時期に親子の絆を築いておくと英語の習得が進んでも日本語が消

えるのを防止できる。

(5) 学校友達時代後半 (9歳から12歳)

自立心が旺盛になる。読解力がつき抽象的な内容の本を読むようになる。言葉の分析力も伸びるため、単語を取り出して覚えたり文法ルールを覚えたりすることもできるようになる。

(6) 地域社会時代 (13歳から15歳)

いわゆる思春期。この時期に一番必要なのは、よい友達集団。このころは、言語によるコミュニケーションが大切で、いっばしに物が言えないと、友人関係で軽んじられることもあり、英語の習得が進むまでは辛い思いをする。クラスのほとんどが母語話者で自分だけ外国人、しかも言葉ができないという状況では、心理的な圧迫が多く、なかなか効果があがらない。

教育の世界には、「そっ啄同時」という言葉があります。「そつ(口へんに卒)」は、ひなが卵の殻を破って出ようとして鳴く声、「啄」は母鳥が殻をつつき割る音を意味します。ひなが、卵からかえる時を見逃さず、親鳥が外から殻をつつき助ける様子から、それぞれ適切な時期に適切な支援が必要であることを教える言葉です。日本語学習においても、それはとても大切です。子供の発達段階を理解し、その時期にふさわしい適切な支援を行うことこそ肝要です。

家庭における日本語指導の心得 7 箇条

補習校や日本人学校等の在外教育施設が、世界にいくつあるか、加えて、それぞれの地域では、何人の子供がそれらの施設で学んでいるかについてご存じですか。

下の表は、施設別学校数と児童生徒数を一覧にしたものです。

資料1 地域別在外教育施設数と生徒数

この表で明らかのように、日本人学校はアジアに集中しています。それに対して補習校は、北米を中心に世界各地に広がっています。補習校の第1号は、北米のワシントン DC 補習校です。開校が1958年ですので、50年の歴史をもちます。このように、数においてもその歴史や経験においても、他地域を圧倒するのが北米地域です。したがって、北米の学校や保護者から私たちが学ぶ取ることも多いはずで

	補習授業校		日本人学校	
	学校数	生徒数	学校数	生徒数
アジア	18	952	32	14277
大洋州	12	704	3	150
北米	86	11716	4	458
中南米	9	110	14	555
欧州	57	2942	21	3056
中東	6	63	7	294
アフリカ	7	82	3	130
合計	195	16569	84	18920

次に紹介するのは、北米で家庭用教材のオンラインショップ「J Kids Square」のウェブページで紹介されて

いる家庭における日本語指導の心得7箇条です。バイリンガル教育に成功している家庭から聞き取ったことを総合してまとめた心得だけに読み応えがあります。実際は、より詳しい説明がついていますが、紙面の関係で、編集したり一部割愛したりしましたことをご了承ください。

心得1：子供が1歳になるまでに、日本語教育をす
かさないかを決心すること。

子供の言語習得の準備は、1歳～2歳の間に整います。また、2歳までに意思をはっきりと持ち、親の指示に反発する子供も少なくはありません。言語習得の準備が整う前に、日本語教育の環境に自然となっていることが大事です。

心得2：日本語を学んでいる子供との友達作りに心が
けること。

子供が親から素直に学べる年齢には限度があります。また、どんな小さな子供でも、他の子供がしていることや話していることに興味を持ち、覚えることがよくあります。特に、2歳前後から、日本語で会話できる友達を持つことは重要。子供からの影響力は、親の数十倍だそうです。

心得3：日本語の学習を、遊びのように楽しいものと
認識すること。

子供は、遊びを通して発育します。そのため、日本語の学習も、遊びの一部として定着させることが大事です。そのためには、親が日本語学習は勉強であって、遊びではないと切り分けられないことが大切です。言い換えれば、親が日本語学習を改めて楽しめば、自然と、その楽しい気持ちが子供に伝わります。

心得4：日本語学習の目的を、子供に説明できるよ
うにしておくこと。

早ければ、3才ぐらいから、子供は様々なことに「なぜ？」という疑問をもちます。周りの子供達が日本語を話していないことに気付くと、どうして自分だけがするのか疑問を持つのは当然です。このときに、自信を持って、その理由を告げることによって、子供の疑問を吹き飛ばし、2ヶ国語を両立することに前向きに進むように導くことができます。決して子供のルールを敷くというように解釈をせず、子供の合意のもと一緒に進むと思ってください。疑問を持つことと、嫌がることは異なりますので、決して誤解をしないようにしましょう。

心得5：日本語を話す状況と、英語を話す状況を切り
分けておくこと。

2ヶ国語を話すように教育する場合は、いつ英語を話して、いつ日本語を話すのか、それぞれの状況を明確にする必要があります。家で、他に英語を話す人がいないのに、親が英語で子供に話しかけていて、たまたま怒ったときだけ日本語になった場合、子供はどちらの言語を使うべきなのか、非常に迷います。子供を迷った状況に追い込まないようにするためには、「おかあさんとは日本語」「日本語が分かる人の前では日本語」「それ以外は

英語」等、明確な切り分けが必要です。特に、小学校に入るまでは注意が必要です。

心得6：親が教え、子供が教えられる環境を家庭内
で持つこと。

子供が学校に入る年齢になると、英語に接する機会が非常に多くなります。日本語を話すお友達と会う機会も減り、家庭でしっかりと日本語教育を継続していかないと、すぐに子供は日本語を忘れていき、第二の日本語学習放棄につながるかもしれません。そのためにも、親子で気持ちよく学習できる量を把握し、喧嘩にならないコツをお互いに習得し、親から教わることに子供が喜ぶ環境作りを完成しておく必要があります。幼児、特に3才頃から、習慣づけていくことが大事です。すべて人任せは、親が子供を掌握できない事態を招きます。日本語学校や補習校に行くことになっても、家庭で学習する作業は減るわけではないので、家庭で学習できる準備が必要です。

心得7：短時間で繰り返す学習を心がけること。

家庭学習の基本は、長期戦と学習意欲の持続にあります。そこで、どなたでもできる方法をいくつかご紹介します。

学習日は月曜から金曜まで、毎日の所要時間は、約15分までと決めます。大事なことは、毎日少しずつ繰り返し学習する癖をつけることです。お子様がもっとしたいと言っても、約束した時間で終わるようにしてあげてください。長時間やると、かえって逆効果になります。

子供と二人きりの場合、親は必ず日本語で話してあげます。英語が混ざるようなお手本を子供に見せるのは、日本語学習のマイナスになります。子供が日本語を話さない場合は強制せず、つられて話してしまうようにもって行ってあげます。お子様が言った言葉は、必ず日本語で繰り返すようにして、日本語でどのように言うべきかを聞かせてあげるようにします。お子様は、普通のアメリカ人以上のことをしていて、いつもがんばっているね、という姿勢で臨むようにします。これぐらいできて当然という態度を親がとると、自然とけんかになり、家庭で教えられないという状況になります。

3才までは、ひらがなの学習よりも、語彙の習得に集中します。言語の基本である語彙が少ないと、会話や読解の上達を妨げることになります。語彙には、物の名称や形容詞など、文章の基本となる要素がすべて含まれます。絵本の読み聞かせ、フラッシュカードでの遊び、親がやっていることを子供に説明してあげるなどを繰り返すことで、語彙は増えていきます。

早い子は3才ぐらいから、通常4才ぐらいから、ひらがなを読む練習をします。一週間に5文字ずつ覚えていきます。例えば、ひらがな表と一緒に見て、

「あいうえお」と一緒に順番に読んでいき、2～3回読んだ後、お母様がランダムにひらがなを指し、子供に答えさせることを数回します。その次に、その文字で始まる言葉を一緒に考えてみます。毎日、違う言葉を使うように指導してあげてください。次に、要らない紙に書き順を見て一回書かせます。正しい順序で書いている場合は、お母様も横で同じように書いてみます。お母様も一緒にやることで、やらされているという気持ちがなくなり、一緒にやっているという気持ちを持つようになります。ひらがなを書くのは、年中以上のお子様からです。年少以下のお子様は、指の筋肉が発達しておらず、文字がうまく書けなくて怒りっぽくなる場合が多くあります。お子様がその週で覚えるひらがなを全部マスターしたと判断したところで、お母様がランダムにひらがなを書き、その読みを回答させるようにします。完全に覚えたところで、次の5文字を追加します。つまり、「かきくけこ」を始める際は、「あ～こ」まで学習するようにします。重複して学習することで忘れないようにします。この所要時間は最高10分です。ひらがなを一通りマスターした場合は、要らない紙や国語ノートにひらがなを毎日1文字1回ずつ書き取りします。お母様は横にいて書き順があっているかを確認したり、一緒に書き取りをしてみます。お子様が書き終わったら、誤字・脱字をカラーペンでマークして訂正させます。書いている最中に間違いを指摘すると、お子様がやる気を失いますので、お子様が書いている間は観察しててください。ひらがなが読めるようになったら、ご自宅にある、赤ちゃん用の絵本を少しずつ読み始める練習をします。お母様の時間によりますが、一日に3分～5分ほどで、一文ずつお母様と交互に読みます。同じ絵本を最低5日は読むようにしてください。英語も一緒ですが、本読みはとても重要な学習方法です。所要時間は、最高5分を目安にしてください。下にお子様がいらっしゃれば、その子に読んであげること、お子様の自信がつかます。ひらがなを完全にマスターしたら、数ヶ月待ってから、同じことをカタカナで行います。カタカナの学習は、海外の場合、年長の時期がベストです。日本では、通常、小学1年生の2学期にカタカナを学習します。上記までできたら、本読みと書き取り（ひらがなとカタカナを毎日交互に書く）で約15分の学習に収めるようにし、月曜日から金曜日まで毎日行うようにします。できれば、日本に対して楽しいイメージを持ってもらうために、一日10分～30分、日本の子供用の番組を見せてあげるのも良いと思います。

日本語を母語あるいは準母語として継続的に学ぶために必要な素地を形成するためには、幼児期の日常的な親子のふれ合いや日本語を話す友達との遊びに加え、～までの方法で、意図的・計画的な学習を行うことが大切であるという指摘です。補習校は、ひらがなの読み書きができることを入学の条件にはしていません。しかし、学齢期直前の子供は、文字に対して大きな関心をもっています。したがって、補習校に入学する前1年程は、文字に触れ文字を認識する最適な時期といえます。積極的に取り組んでください。

おわりに

本稿は、外国で生まれ育つ子供を想定し、母語を育てるための秘訣や留意点について考えてみました。参考にいただければ幸いです。一方、補習校には、日本から来たばかりの子供もいます。補習校の大半をしめる日本から来た子供は問題がないかといえばそうではありません。

あまり話題として取り上げたくはないのですが、日本から来た子供であっても、面接考査の段階で、テストで漢字をはじめ、言語事項が極端にできていない子供、文章の読み取りに著しく難がある子供、音読をさせると拾い読みであったり、簡単な質問に的確に答えられなかったりする子供もいます。面接考査でそのような状況であった場合に加え、近い将来日本にご帰国になるお子さんの場合は、日本人学校への入学を強くお勧めしています。2ヶ国語で学習することにより、どちらの言語も中途半端になるリスクを避けることが必要であると考えからです。

小さい子供は、学校選びで不満をもらすこともありません。親の決定を素直に受け入れます。少なくとも、小学校低学年までの学校選択は、すべて親の責任であると言えるでしょう。

したがって、「現地校及び国際校と補習校という組み合わせでバイリンガル教育を目指していらっしゃる保護者の方々におかれましては、子供の言語に対する興味・関心の程度、性格、学習にあたっての準備状況等の要素を正確に把握することに努めるとともに、日本人学校に通うという選択も排除することなく、適切な判断をすることが必要である」ということを申し述べ、バイリンガル教育の基礎と題した本稿のまとめといたします。なお、本稿の執筆にあたりましては、次の書籍を参考にいたしました。

【参考文献】

バイリンガル教育の方法 中島和子著 アルク
言葉と教育 中島和子著 海外子女教育振興財団